

## 在外研究レポート(下)

### 独・ライプツィヒ大学

木戸衛一・助教授

ライプツィヒ大学は、創立1409年12月2日。600周年まで、あと8年足らずである。学生数は、のべ2万5454人(2000/01年冬学期)。場所柄、東独出身者が圧倒的で1万9444人(77%)、西独出身者は3979人(16%)、残り2031人が外国人という割合である。

実は私は、1985～86年、この大学の歴史学部に籍を置いた経験を持つ。当時の名称は「カール・マルクス大学」。今でも、大学本部の正面には、マルクスの巨大なレリーフが掲げられている。とは言え、時代の変化は、大学の外観からもしっかり見て取れる。本部正面には、1968年に爆破されたパウリーナー教会(別名「大学教会」)をかたどった鉄骨の彫塑が、マルクスのレリーフに重なっている。本部脇の高層研究棟(1973年完成)は民間に払い下げられ、大学の各部局は市内に分散した。女子学生寮「ジェニー・マルクス」だった建物は、今では事務棟だ。第二次大戦の空襲で3分の2が破壊され、東独時代満身に修復されなかった、ベートーフェン通りにあるネオルネサンス様式の中央図書館は、1992年秋からの補修工事が最終段階を迎えた(蔵書計400万冊、開架書庫に44万冊)。

### 卒業生 近況

#### OSIPPで知り合い

#### 昨年結婚した

木村純平

敬子(旧姓中井)さん

ともにOSIPPで学んだ卒業生。自習室が同じであったことがきっかけで知りあい、昨年2月に結婚した。現在は東京・世田谷区に住む。

純平さんは98年、OSIPPの博士前期課程に入学、黒澤満教授の下で、国際法、国際政治理論を学び、国際捕鯨の問題を事例として取り上げた。2000年、外資系の情報・経営系コンサルティング企業「アクセンチュア」に入社し、企業や官公庁からの依頼

ライプツィヒ大学では、文豪ゲーテも1765年、16歳の秋に法律を学び始めた。もっとも、大学での勉強に退屈した彼は、わずか3年でこの「小パリ」を去った。今日市場広場裏手にあるゲーテ像は、顔こそ大学に向いているが、足は1525年創業の酒場「アウアーバッハスケラー」に進もうとしている。一般に「ぐうたら学生」が市民の嘲笑の的だったことは、往時の風刺画などからも窺える。

## 建学六百年の重みと 時代を映す変化の波

それに比べ、今の学生生活は随分せわしない。授業料はタダで、生活費も日本よりはるかに安く上がるのだが、それでも奨学金だけでは間に合わず、アルバイトに忙しいのだ。かつて西独には、何歳になっても悠然と勉強を続ける「永遠の学生」が結構いたが、よかれ悪しかれそうした余裕は社会全体から失われつつある。

大学をめぐる環境も、厳しさを増している。大学関連予算を2割削減するザクセン州政府の方針に、学生たちは全学ストや街頭での抗議行動で対抗した。もちろん、教員の危機感も募っている。優秀な研究者の卵が、大学に残っても展望が開けないと、別の職業に転身していくのを見るのは、実に歯がゆく口惜しい。

に応じてコンピューターシステムを利用したコンサルティングに携わっている。もともとコンピューターに興味が高く、「仕事に充実感はあるが、満足せずにスキルアップを果たしたい」と話す。

敬子さんは、民間企業で働いた後、97年OSIPPの博士前期課程に入学。林俊彦教授の指導で電気通信産業における競争政策や、研究開発における技術移転の経済分析を研究した。自分が一番やりたい、向いている仕事として公務員を志し、キャリア職で科学技術庁(当時)に入省、現在3年目。今は文部科学省大臣官房国際課企画係長として、教育・文化・研究開発サービスの自由化問題などを扱っている。「国際機関や外務省などの窓口とし

そもそも東独では、就職自体が難しい。一般に東の大学は、設備が新しく、教員と学生との関係が緊密なため、西独出身の学生にとっても大きな魅力となっている。ところが、大学での勉強を終える段階になると、地元出身の学生ですら仕事を求めて西に移らざるを得ない状況は、痛ましいと言う以外にない。なお、東独地域が抱える構造的問題については、拙訳『岐路に立つ統一ドイツ』(フリッツ・フィルマー編著、青木書店、2001年)を参照されたい。

最後に、ドイツの大学で教える立場になって困ったこと。それは成績評価である。ドイツでは、不合格は別にして、合格の成績が1.0、1.3、1.7から3.3、3.7、4.0まで何と10段階に分かれる。優・良・可という大雑把な区分に慣れた人間としては、採点の際しばしば迷った。結果的には、受講者がかわいさからかなり甘めの評点になってしまったが、これは1年しかつきあえなかった外国人教員のご愛敬ということで見逃してもらおう。

前号の「在外研究レポート」で編集部のご校正が不完全だったことをお詫び致します。

て、また、省庁再編により広がりが増えたので、とてもやりがいのある仕事」と言う。

一緒に過ごせるのは週末だけとなりがちだが、「結婚を機に仕事も含めてお互いを理解し、尊重し合えるようになり、幸せな毎日」だそう。

OSIPPの2年間は、多様で活動的な友人に恵まれ、かつ理論だけでなく政策も学べて有意義だったと振り返る。「大学院の生活は自分の好きなこと、好きな研究に100%うちこめる環境だから、その醍醐味を十分に味わって欲しい」と後輩を激励していた。

同窓会コーナー  
OSIPP ALUMNI